

私のことを拾ってください

ちーちゃん

ある日のこと、クラブで遅くなった女の子が、早く家に帰るために、近道の草むらを通って帰ろうと思つた。その草むらは、よく友だちと行っているの、行きなれている道だ。女の子は、急いで駆け足で草むらを通りすぎようとしたとき、ふと気配を感じた。それは「拾ってください」と書いてある一つのダンボールだった。気になつて箱をのぞいてみると、鎖に繋がれた片腕を見つけた。女の子は気味が悪くてそこらへんにあつた木の枝を投げてみた。片腕はその木の枝を拾い、自分の絵を描いた。

「えっ、けっこう絵を描くのうまいじゃん。」

私は思わず口に出した。私はカバンに入れていたスケッチブックと鉛筆を出した。片腕は文字を書き始めた。

「絵を描かせてくれるだけでけっこうです。なので拾ってください。」

その言葉に女の子は、「まっいつか。」と思つた。

そしてこっそり家に持つて帰つて、絵を描かせてみた。そして、その絵をネットに上げると、こんな声が

上がってきた。

「あれつて、死んだはずの画家じゃない？」

「え、これつて、あの死んだ画家じゃん！」

そのコメントにゾツとした。「まっいつか。」女の子はそう思い、そのまま絵を描いては、ネットに上げるということをやり続けた。

ある日のこと、いつものように絵をネットに上げようとすると、突然本棚が揺れて、倒れてきた。すると、腕が挟まれてしまった。女の子は助けを求める人がおらず、困っているときに片腕がいることに気づいた。「ねえ、助けてよ。絵は思う存分に描かせてあげたでしよ。だから助けてよ。ねえ。」

「嫌だ。私はあなたのために、絵を描いてきたんだよ。」

「ねえ、お願いあなたの願いも聞くから。」

バン・・・大きな音がした。

そして一年がたつて中学生になった。

「ねえ、はるかかつて絵上手いね。」

「えっそんなでもないよ。」

まあこの腕はあたしのではないけど・・・だって、あいつの夢を叶えた代わりに・・・